

フィリピン・ミンダナオ 平和と開発

信頼がつなぐ平和の道程

落合 直之

OCHIAI Naoyuki



コラム④ 建物の力

ピキット町ブアラン村小学校

ミンダナオ島中部の北コタバト州ピキット町は、以前から紛争の絶えない町である。1950年代からのフィリピン政府によるミンダナオ移住政策によりキリスト教徒が多数移住して来て、古くから住むイスラム教徒との間で争いが頻発していた。また2000年、2003年そして2008年のフィリピン国軍とMILFとの紛争の激戦地域の一つであり、多くの国内避難民が発生した。同町西方に位置するイスラム教徒の集落ブアラン村にあるブアラン小学校も戦場となり、校舎は破壊されたままであった。戦争が終結し生徒達が戻っても校舎は使えず、椰子の木で作った屋根と柱だけの教室で授業は再開された。

北コタバト州の州都であるキダパワン市に本拠を置くNGOミンダナオ

子供図書館（MCL）は、地域の村に入って絵本などの読み聞かせ活動、医療支援、就学支援、保育所支援、難民救援活動、植林活動などを行っている団体である。創設者の松居友氏は本当に凄い人だ。MCLのミッションである愛を必要としている不幸な子供達に仕え、互いに愛し合うこと。悲しみの中にある子供達に喜びを、傷ついた心に癒やしを与え、互いの文化を分かちあい、一つの家族として生きること、そして夢をかなえて平和な世界をつくることを、正に人生を通じて体現している。キリスト教、イスラム教、少数民族の分け隔てなく、500名を超える恵まれない子供達に奨学金を提供し学校に通わせている。キダパワン市のMCLにも多くの子供達が寄宿して、そこから学校に通っている。松居氏の熱い情熱に感服した私は、何度もMCLに通って子供達の屈託の無い笑顔に勇気もらった。

このMCLの要請に基づき、ピキット町ブアラン村の小学校再建の建設工事が日本政府による「草の根無償資金協力（略称草の根無償）」により、2011年4月から始まったのである。草の根無償は、人間の安全保障の理念を踏まえ、開発途上国における経済社会開発を目的とし、草の根レベルの住民に直接裨益する事業のために必要な資金（供与限度額は、原則1,000万円以下）を供与するものである。



J-BIRDで新築されたブアラン小学校

提供：筆者

建物のチカラ

イスラム教徒主体のブアラン村と山の上のキリスト教徒の村であるニューバレンシア村は長い間対立し、村人が互いの集落に入ること拒絶してきた。しかし、MCLが両村に保育所を建設したことをきっかけに、徐々に接触を持つようになった。松居さんの狙いは、ブアラン村のイスラム教徒住民とニューバレンシア村のキリスト教徒住民の和解と共存を進めることである。その狙いを汲み取った私は、ブアラン村の村長に会って聞きたいことがあった。「あなたはキリスト教徒への恨みは無いのですか?」。私より一回り大きい村長は、私と会って開口一番に、「村や周辺地域を昔々、宗教に関係無く皆が平和に暮らしていた時代に戻したい」と言った。そして、私を含めてイスラム教徒住民とキリスト教徒住民は、家族の誰かが殺されている。恨みは一生掛かっても消えないだろう。しかし、恨みを子供の世代に引き継ぐべきではない。村の未来を担う子供達が、宗教に関係無く平和に暮らせるような村に戻したい。そのための一歩として、小学校を建設したいと訴えた。

また私は、ニューバレンシア村に住むクリスチャンの女性に会って話を聞いた。女性の父親も兄や弟、そして母親も既に他界していた。女性が学生だった頃のある夜、黒いシャツを着て武装したムスリムが自宅にやって来て、銃を乱射した。当時は至る所で繰り返られていた風景かもしれない。一瞬の内に家族を失った女性は、親戚に身を寄せ成人し、今では4児の母。あの日以来、場所は変われども、ピキットに住み続けている。他に住む場所が無いのも、理由のうちの一つではある。「将来和平合意が結ばれ、ここピキットが新しいムスリムの自治政府に編入することになったら、クリスチャンであるあなた達家族はどうしますか、町外に引越しますか?」と聞いた。すると、女性は少し考える風にこう答えた。「子供達が平和に暮らせるのであれば、

ここがムスリムの自治区になったとしても構いません。私達はもう争いは嫌です」。女性の家は高台にあり、丘を下れば小学校がある。小学校はムスリムの子供達ばかりだ。自分の子供達は、村外れのクリスチャンが多く通う小学校に通わせている。歩いて1時間近くかかる。丘の下の小学校に通わせても、今は昔と違って何も危険なことは起こらないであろうことは分かっているものの、今一つ決断することができないでいた。

建設は急ピッチに進み、工事には生徒達の両親達も建設会社の指導を受け積極的に従事した。父親は金槌やスコップを持ち大工となり、母親は炊き出しに大わらわ。ブアラン村のイスラム教徒だけではなく、ニューバレンシア村に住むキリスト教徒も一致団結に協働して、「子供達のために」と汗を流した。ブアラン小学校新校舎の建設が進むにつれてニューバレンシア村から通う生徒が徐々に増え、両村の交流は活発となり、ついに両村は平和のための「合意文書」を締結するに至った。さらには、ニューバレンシア村からブアラン小学校に至る急な山の斜面に、子供達が楽に安全に小学校に通えるように、両村民が協力して道路が開かれた。ここにまた「協働」が生まれ、敵対していた村人達の間「平和の礎」が築かれることになったのだ。

私は建設工事に立ち合っている時、ふとJICAに入構する際の筆記試験での小論文に書いた内容を思い起した。それは私が大学生時代、洞窟の探検調査のためにババア・ニューギニアに海外遠征したことにまつわることを述べたものだ。南ハイランド州のメンディという州都でトラックを借りて4日間かけてコロバという町に到着。そこからさらにジャングルの中の道なき道を徒歩で7日間かけて、ゴリという村に到達した。州都から11日もかかったゴリにベース・キャンプを設営し、2カ月間にわたって大規模な洞窟を探検調査したのだ。

コロバの町には電気が引かれ、小さいながらもスーパーマーケットがあり、コカ・コーラが買える。近代文明の恩恵を感じさせる。ゴリの村には近代文明を感じさせるものは、何も無い。有るのは自然そのままの情景。道路が引かれ、車が走るという条件の違いが、コロバとゴリ的发展度合に違いをもたらしていることから、私はJICA入構の筆記試験の小論文で、「道路」というインフラの力（チカラ）が社会の発展を導くと、今思うと恥ずかしくなるほどに偉そうに書いた。

ブアラン村の小学校校舎の建設、つまり「建物」というインフラの力（チカラ）は、紛争を経験したコミュニティに平和をもたらす。その歴史的瞬間に立ち会っていることを実感していた私は、小論文に書いた内容はまんざらでもなかったのだと、心の隅っこで少し誇らしく思った。



ブアラン小学校ではクリスチャンとムスリムが共に学ぶ 提供：筆者